

尾張七宝の祖 梶常吉

「常吉、常吉。お父さんがお呼びだよ。」

「また、本かい。そんな古い本ばかり読んでいないで、早く仕事をしておくれよ。」

常吉には、母の声など耳に入らなかつた。たまたま見つけた古い本に書かれていた「七宝焼」のことで、頭の中はいっぱいだったのである。

（七宝焼：七色にかがやく焼き物とは、いったいどんなものなのだろう。ぜひ焼いてみたいなあ。）

常吉は、何かを心の中に秘めて、父に、おもむろに話しかけた。

「お父さん：七宝焼を見たことがありますか。」

「なに、七宝焼？あの宝物といわれる七宝焼のことか。」

「そうです。知っているんですか。」

父は、人から聞いたという話をぼそぼそと語り出した。それは江戸時代（1600年ごろ）、京都のある焼き物師がオランダ人から学んだ、世にも珍しい焼き物を焼き上げ、將軍に差し上げたという話である。

「で、その七宝焼がどうしたというのだ。」

「実は、わたしも、その七宝焼を焼いてみたいのです。」

「ば、ばかを言つちやあいかん。七宝といわれるように、金や銀を使って焼くんだぞ。そんな高い材料を買う金がどこにあるんだ。それに第一、焼き方さえわかつていないんだらう。」

「それを研究して……。」

「家には、メツキ業という仕事があるんだ。つまらないことを考えないで、家の仕事をがんばっておくれ。」

食べていくのがやつとの常吉の家では、まるでよその世界の話であった。しかし、常吉の心は、すっかり七宝焼のとりこになってしまっていた。1822年、梶常吉が十八歳のときであった。

七宝焼きの手がかりを探しに、会う人ごとに尋ねた。しかし、全く手がかりはない。決意から二年、仕事そつちのけで研究のうちこんだ。当然生活はますます苦しくなり、さすがに常吉も迷った。（このまま研究を続けてよいものだろうか：。とにかく、もう少しだけいろいろな人に聞いて、それでもだめならあきらめよう。）

そんなある日、ついに常吉の思いが実った。父のお使いで名古屋へ来た常吉は、一軒の店先にくぎ付けになってしまった。一枚の皿が目に入ったのだ。

（なんとという美しい皿だ。まだ、見たことのない色合い：。これこそ、七宝焼に違いない。）

それからというものは、用事で名古屋へ来るときだけでは我慢できず、家の仕事も早く切り上げ、皿を見に通い続けるようになってしまった。そして、店先で、何時間も、じつと皿を見ていたのである。そんな日が一週間ほど続いた。

「気をつけるよ。今日もまた、来ているぞ。」

「油断するなよ。店の品物を盗んでいくつもりかもしれないぞ。」

毎日来ては、店先で何時間も皿とにらめっこしている常吉のことを、店の者たちが怪しく思うのは当然であった。そんな店の者たちの話を聞きながら、主人嘉兵衛は、店の奥から、そつと常吉の様子を見ていた。

「しばらくして、主人は、常吉を店の中に通して、わけをたずねた。」

「あの皿がお気にめしたようでございますが……。」

「はい。先日、お店の前を通ったときに見たあの皿が、目に焼きついて離れません。きつと、あれが七宝焼に違いないと思うと、何をしていても、足がひとりでここに向いてしまうのです。」

「確かに、あの皿は七宝焼です。で、どうして、あなたは七宝焼のことをご存知

なのでしよう。」

「常吉は、家にあつた本で七宝焼のことを知ったこと、焼き物師である以上、ぜひ、そういうすばらしいものが焼きたいと思つたこと、今までもいろいろやつてみたが、実物を見たことがないから、どうしてもできなかったことなどを熱心に話した。」

「そういうわけで、実物をお店で見つけたものの、高価な七宝焼など買えるはずがない。買えないものなら、せめて、よく見てと……」

「熱心に話し続ける常吉の言葉に、じつと聞き入っていた嘉兵衛は、やがて静かに話し出した。」

「よくわかりました。その熱心さに感心しました。七宝焼を、この日本でもできたらどんなにうれしかわかりません。あなたとわたしの喜びだけではありません。日本にとつても大きな利益になることです。ぜひ、あなたの手で、七宝焼を作り上げてください。店先に出してある七宝焼の皿は、あなたに差し上げましょう。」

「えつ、本当ですか。」

「冗談でこんなことは言いません。その代わり、一つ約束をしてください。」

「なんでございますか。」

「日本で最初の七宝焼ができたなら、最初の品をわたしに買い取らせてください。」

「あ、ありがとうございます。必ず七宝焼を作り上げてお見せします。」

「家へ着いてすぐに研究にとりかかろうとすると、父が常吉を呼んだ。「父さんは、きつとまた七宝焼作りを反対するのだろう……。」そう思いながら、父の元へ急いだ。」

「お父さん、何でございましょう。」

「七宝焼のことだが……まだあきらめていないのか。」

「もちろんです。それに実は先ほど、本物の七宝焼を手に入れました。これを研究すれば自分でも作れるはずですよ。」

「……お前の熱意はよくわかつた。もう反対するのはよそう。生活のことも心配するな。思う存分研究に打ち込め。そして必ず七宝焼を自分の手で作り上げるのだぞ。」

「父さん……ありがとうございます。」

しかし、なかなか思うように研究は上手くいかない。仕事にかかれれば食事のことは忘れてしまう。母が、体を心配して、食べ物や仕事場へ運んで置いてくると、茶碗の中へ、うっかり粘土を放りこみ、ご飯といっしょにこねて、焼いてしまふようなこともあつた。

焼き上げたばかりの皿を手に、常吉は、がつくりと肩を落とした。生活のため、飛んで行つて土をもらい焼いてみた。火の強さも変えてみた。失敗につぐ失敗が続いた。焼き始めてから、さらに何年も月日が過ぎていった。

急に何を思つたか、常吉はそばにあつた金づちをつかむと、七宝の皿をめがけてふりおろした。

「バシン！」くだかれた皿の破片が、周りに飛び散つた。すると、思いがけないものが出てきた。七宝の絵の奥から現れたのは、こげ茶色の皿の形をした銅板であつた。

「そうだったのか。七宝焼きは陶磁器ではなかつたのか。これが七宝焼きのひみつだつたんだ。今まで外側からしか見なかつた。こんなことでは同じものが作れるはずがない。」

七宝焼きのだいたいの仕組みはわかつたが、本当の戦いはこれからだつた。果たして、自分でできるだろうか……。いや、やらなければならぬ。ここまできめて引き返すものか。常吉は完成までのはるか遠い道のりを、一步一步あるきは

めつきりやつれた常吉は、薄暗い小屋から、ほとんど出ようとしなかった。しかし、周りの人の悪口も、研究に打ち込む常吉の耳には入らなかった。あと一息だ。研究を始めて、数年後のある晴れた朝のことだった。

「できた。」

常吉は静かにつぶやいた。何日もかけてみてきた十五センチほどの杯は、朝日を受けてまばゆい光を放っている。急いで、松岡屋の主人、嘉兵衛を訪ね、

「約束通り持って参りました。この国で初めての七宝焼きです。どうぞお納めく

ださい。」

「おお、これは見事な色だ。よく頑張りなされた。さぞ、ご苦労もあつたことで

しょう。」

嘉兵衛も、うつすらと目に涙を浮かべている。

「よろしい。これならば、五両で買い取りましょう。よろしいですか。」

五両といえ、かなりの高額だ。(現在の価格で約40万円)これからたくさん作られることになる七宝焼きの価値を、嘉兵衛は初めから高く認めてくれたのだった。常吉は嘉兵衛の厚意に胸が熱くなった。そして、ますますその技に磨きをかけ、もつとすばらしいものを作ろうと心に誓った。常吉が七宝焼の研究を始めてから、実に十四年、三十一歳のときのことであつた。

その後常吉が考え出した七宝焼きは、その弟子たちによって、美術工芸品として高められた。やがて日本を代表する工芸品の一つとして、海外にも輸出されるほど、高い評価を得ることになる。その生産の中心だった地域は、今では「七宝町」という町名になっている。

